

日経MJ 2019年 10月21日付

グローバル化のきしみ

先日開かれた、ある国際会議で、米ランプ政権の諸政策が国際社会に及ぼしている影響について、パネルディスカッションが行われた。私もその議論に参加したのだが、司会から3つのキーワードでまとめるように指示された。そこで、「グローバル化」「国家主権」「民主主義」の3つを選んだ。これは、グローバル化の「トリレンマ(3つの現象の間に成立するトレードオフの関係)」と呼ばれるものを示している。この3つを同時に成立させることは難しいというのがグローバル化のトリレンマで



伊藤元重の

エコノオッチ

ある。現代の国際経済は、時に「ハイパーグローバル化」とも言われるように、急速にグローバル化が進んでいる。それが国家主権や民主主義に大きな庄力を及ぼしている。まず、民主主義の視点から見れば、グローバル化の動きの中で不満を持つ人が増えてきた。そうした声を背景に保護主義的な政策を前面に打ち出したトランプ政権が生まれた。グローバル化の進展によって、民主主義がポピュリズム(大衆迎合主義)に変質したと見る事ができる。グローバル化がポピュリズム

経済、米中2軸に分断予感

ムを生み出しているのは米国だけではない。英国の欧州連合(EU)からの離脱、Brexitにもそうした面がある。過度なグローバル化がポピュリズムの原因となるとすれば、それはトランプ大統領の個人的な性格の問題というよりも、より構造的な現象だ。トランプ以降でも、ポピュリズムが弱まるわけではない。ある人はトランプ政権の政策を第1ステージのポピュリズムと呼んだ。この先に第2、第3ステージのポピュリズムがありえるというのだ。先の国際会議で話題になったのは、来年の大統領選に向け、民主党の中でエリザベス・ウォーレン氏のような

左派の台頭が見られることだ。仮にそうした大統領に代わることがあっても、米国の保護主義的な姿勢に変化はないだろう。さて、トリレンマのうち一つの項目である国家主権も重要な要素だ。トランプ政権は「アメリカファースト」を叫び、WTO(世界貿易機関)などのグローバルなルールを破壊しようとしている。国家主権を振りかざし、グローバル化を壊しているとも見える。一方で、米中との経済的対立関係が強まっている中国は、民主主義が抑制される体制の中で、国家主権を振りかざしながらグローバル化の中で経済力を高めてきた。こうした2つの巨大国家

が国家主権をぶつけ合うなかで、グローバル化に大きなきしみが生まれている。先の国際会議では「グローバル経済の二分化(ディカップリング)」という言葉が何度も取り上げられた。貿易だけでなく、ドルを基軸とした国際金融システムとして人の動きなどで、米中は中国を排除するような動きを見せつつある。その結果、グローバル経済は米中と中国という2つの軸に分断されるといふ。ディカップリング論がどこまで現実的かは分からないが、グローバル化が変質しつつあることには注目すべきだ。(学習院大学国際社会科学部教授)